

## 大正・昭和前期の日本史「最近世」

坂本 賞三

## はじめに

昭和二〇年八月を境として日本史概説書の内容が大きく変えられた中で、それまで明治維新以後の時代区分を「最近世」と称していたのを「近代」若しくは「現代」と変えたものが多くみられたこともあげられよう。ただし明治維新以後を「近代」と称したものはすでに昭和一桁代からみられはじめていたことであり、また「最近世」という時代区分用語も戦後しばらくの間は代表的な日本史概説書とされたものにおいても続けて使われていたものがあり、両者の交替が一举になされたのではなかった。が明治以後を「最近世」とよんだ日本史時代区分名称も、戦後ほぼ二十年ほどで「近代」に変えられていって、現今では若い世代の人々は日本史で「最近世」という時代区分名称が使われていたことがあったこともほとんど知らないのではなからうか。

ここで戦後に代表的な日本史概説書とされた中の二冊を例としてとりあげてみよう。

坂本太郎『日本史概説』（至文堂）は戦後になって刊行されたものだが（上巻が昭和二五年、下巻が昭和二六年）、ここでは「最近世」が使われている。しかし昭和三七年に新訂版が出されたとき、「最近世」は「近代」に変えられた。川上多助『日本歴史概説』（岩波書店）は戦前に刊行されていたものだが（初版は上巻が昭和二二年、下巻が昭和一五

年）、そのまま改版されることもなく戦後にも版を重ねた珍しい例で、私がつけているものは昭和二五年に出版されたもの（上巻は第十二刷、下巻は第八刷）だが、下巻の第四篇の本文の題は「最近世」とされている。ただしその偶数頁の本文の右肩に付されている小活字の篇名は「現代」に変えられていた。

ではこのような明治維新以後の日本史時代区分名称を「最近世」と称したことは、いつどのようにしてできたのであろうか。まずはじめにこの問題からとりあげることにしよう。

## 一、日本史時代区分「最近世」の出現

黒板勝美『国史の研究』は、初版が明治四一年（一九〇八）、ついで五年後の大正二年（一九一三）に改版が出され、また昭和六年（一九三二）から更訂版が刊行されはじめたもので、国史研究の解説書として有名な存在で、戦前には中等学校以上ではどの学校でも備えられていたといつてよいものであった。

ところで同書では初版から更訂版に至るまで著者黒板勝美（一八七四—一九四六）が諸先輩の国史区分法を参考としながら私案の国史時代区分を掲載している（各版ごとに多少の変更がなされている）。その初版（明治四一年版）の国史時代区分私案の最終の「明治立憲時代」の説明では次のように記している。

この時代は寧ろ現代史ともいふべきもので、専門の歴史家としては之を取扱ふべきものではない、専門の方ではまづ普通に五十年ぐらゐ以前までの事柄を調査し研究することに止めて置くことに定められているので、五十年以内は歴史上に現はれて居る人物が猶ほ生存せるもの少くないので、材料によつては之を社会に公にすることが、その人の一身に取り利害関係を有するのみならず、時としては国家の利害にも大関係を及ぼすものであるから、かゝる種類は多く秘密に附せらるゝものである、殊に外交や軍事などに関したものは最もこの傾向を有して居る、さればたゞ表面に現はれた事実のみによつて僅に之を記述して想像を加へ論評を試みるを得るに過ぎぬので、複雑したる真相を穿つて公平なる観察をなし真正の歴史を著すことは甚だ六ヶしいといはねばならぬ。又た一方から考へても、歴史家たるものが現在直接に個人若しくは国家の利害に関係ある事実を暴露するが如き挙動に出で、自ら快とするは既に学者の態度でない、またその国民としてよく忍んで為し得べき行でないのである。故に本書に於てもしばらく幕末に止め、たゞ関係事実のある場合にのみ之に論及する積である、されど現代史の必要なるは政治家に取り、実業家に取り、はた外交家教育家等に取りて今更いふを待たぬ、また国民としてその一般を知らねばならぬ、即ち表面の事実だけでも歴史的研究を加へ、現在に於ける要求に應ぜねばならぬが、それらは世自らその人あるであらう。

ここに記されているように、専門の歴史家はふつう五十年ぐらゐ前までのことを調査・研究するに止めておくことに「定めてある」といふことは、戦後昭和三〇年に藤井甚太郎が明治史研究を回顧した小文<sup>1)</sup>を記したとき、その冒頭に、

史学では近い五十年以後は研究の対象とはしないという説が、昔<sup>1)</sup>し一般に行われていたので、近い頃のことは顧みない風があった。廿年位前に、或る大学では、明治維新史などの話も聞いている。独立すべきでないという議論が、教授会で出たとの話も聞いている。大学の講義題目に「維新史」が出たのは、大正十年頃に東京帝国大学文科大学で萩野由之教授が一年か二年か開講せられたのが初めかと思う。次いで大正十四年度から京都帝国大学文学部で講師として小生が講義し初めた。これは三年続講次いで大塚武松氏が講義せられそれから隔年小生が講義し、昭和十七年頃迄続いた。明治維新史すら斯様であるから、明治史の如きは猶更であつた。此れは当時史料が十分に出揃っていないから、吟味を科学的に行うことが困難であり、従つて学問としては成立たないという議論からであると思う。尚徳川時代に行われた理屈のように、「御当代」の厳正な批判は遠慮すべきであるということと、関係者が未だ生きているといふ理由も潜んでいると思われる。(下略)

と記していることからわかり、またその実例として、昭和七年（一九三二）に刊行された本<sup>2)</sup>に収められている加藤仁平「教育史」の項に、「明治は未だ歴史家の研究の対象とはなり得ないと考へてゐた自分も」昭和五年から「初めて明治教育史の研究に交渉をもつた」と記している。ところが黒板は『国史の研究』初版を出してからわずか五年後の大正二年（一九一三）に同書の改版を出版した。そこで再び国史時代区分の私案を掲載し、その末尾「憲政時代」の項では、初版と同様に五十年ほど前までの調査・研究に止める「定め」をくりかえしていたのであるが、その次の第五章「国史の範囲」で、突然次のようなことを提起しはじめるのであつた。

併し猶ほ少しくこゝに補つて置きたいのは、所謂最近世といふ時

期である、これは専門家としても大に心がけねばならぬ時期で、現在に最も近い時期の歴史的研究である、特にその最近世なる時期が現在の時代と、その文化的內容等に區別せらるべきものありとせば、まずその研究は必要となり来り、史学研究法の上からいっても、現在の史実から溯つて或時代の史実を研究するに大切な連絡をなすものである、例へば我が明治時代に於て觀察せんか、第一に明治維新の大業といふのは我が国史上重要な出来事で、大化の改新以上の大なる史実である、従つてその後内治の改革、憲法の發布となり、立憲政体となりし後、彼の日清日露の二大戦役を経、台湾及び樺太の半ば我が有に歸し、南満州は租借地となり、遂に韓国併合といふことになつたのは、その年数が僅々四十余年に過ぎずとするも、立派に一の大きな時代で、四十五年七月に不世出の英主明治天皇の崩御は、實にこの時代の終を画すべき痛悼ましき出来事であつた、されば明治時代は大正の今日からいへば之を最近世史として研究すべき十分なる理由を有して居る、丁度独逸に於て一千八百七十二<sup>(1)</sup>年普仏戦争後独逸帝国が今日のやうに統一せられた以後、ビスマークの執政時代を最近世として觀察するのと全く同様で（下略）

すなわち、前記の歴史専門家は五十年前までの事柄の調査・研究に止める「定め」から、一転して、「現在に最も近い時期の歴史的研究」である日本の「最近世なる時期」の研究の必要を力説し、「明治時代は大正の今日からいへば之を最近世史として研究すべき十分なる理由を有して居る」として、ドイツで普仏戦争以後にドイツ帝国が統一された後、ビスマークの執政時代を「最近世」として觀察しているのと全く同様、というのである。

そしてこの黒板の提起は、直ちに後輩で黒板と同じく東京帝国大学

文科大学助教教授である辻善之助が大正四年に著した『田沼時代』の中でとりあげられた。同書の「結論」で、「いわばこの時代は新日本の幕開きである。日本最近世史の序幕を成すものである。」と記されているのであつた。

さらにかの黒板の提起は、黒板と文科大学同期に卒業した内田銀蔵にも影響を与えたが、このことは後述する。

以上みてきた黒板の日本史における「最近世」史研究の提起が受けつがれて、本稿のはじめに述べた日本史概説書の「最近世」に至つたのであるが、いまここでその大正・昭和前期の約五十年間に「最近世」がどのように使われてきたかを述べる余裕はないので、本稿ではこれ以上立ち入らないことにする。

## 二、黒板提起「最近世」用語の由来

では、この黒板の問題提起で使われた「最近世」という用語はどのような由来の用語なのであつたのだろうか。というのは、黒板が日本における「最近世」研究を提起しはじめた大正二年（一九一三）に、日本において「最近世」という用語の基になるべき「近世」の概念が存在していたらどうかという疑問があるからである。

すでに拙稿で何度もとりあげたように、明治三十六年（一九〇三）に内田が上梓した『日本近世史』で提起した西欧史モダンエイジを日本史江戸時代に比定した構想は、内田が在欧中にその誤りに気付き、明治三十九年（一九〇六）に帰朝した後全く統稿出版に着手することなく同書は中絶し、かの構想は破綻し、日本の学界でも（内藤湖南を例外として）全く同調する者はなかった。だから江戸時代と西欧史モダンエイジに比定し、モダンエイジの和訳語「近世」をそのまま江戸時

代の時代用語にあてた内田の試みは日本史上で時代史を設定するといふ先駆的意義を残しながらも全く無に帰してしまっていたのであった。だから明治三十九年に内田が帰朝した後同書が中絶となった後は、日本史で「近世」という時代名称は江戸時代の別称によるものしか存在しなかつたはずなのである。

であるから、江戸時代の別称「近世」を基にした「最近世」とよぶことがあり得たはずはないのである。そもそも黒板は前記大正二年の「最近世」提起で「明治時代の大業といふのが我が国史上重要な出来事で、大化の改新以上の大なる史実である」と記しており、江戸時代との関連など全く触れていなかった。またその後の日本史「最近世」論者もすべて日本史「近世」に触れることはなく（前掲『田沼時代』のように日本最近世史の序幕を成すものとして田沼時代をとりあげたのはそれだけのことであつて、江戸時代全体に及んでいたわけではない）、その後の日本史「最近世」というのはすべて現在（大正また昭和となる）に直接前接する時代という観点だけの用語として使われたのであつた。『更訂国史の研究 総説』に記されている黒板私案の国史時代区分の最末「憲政時代」の記事に「明治時代と大正時代の二つの時代を併せて普通に之を最近世といつてゐる」と記し、「昭和時代」普通にこれを現代といつてゐる」と記している。

ではかの黒板が使つた「最近世」とはどのようなものだったのであるか。黒板はかの文中で「丁度独逸に於て一千八百七十二年普仏戦争後独逸帝国が今日のやうに統一せられた以後ビスマークの執政時代を最近世として観察するのと全く同様で」と記していたが、この「最近世」という用語をそのまま使つたと考えられるのである。実際にそのような背景がそのころ日本に存在していたのであつた。

ヨーロッパの歴史学界では、十六世紀のはじめから二十世紀になる

うとする四百年近くの長い間のモダンエイジの中で、十九世紀から後をモダンエイジの中でも特に現代に関係が深い時代として、それまでの時期よりも特別扱いする傾向がみられはじめていた。このことは日本でも理解されてきており、次に述べるように明治二十九年（一八九六）には坪井九馬三が西洋のウィーン会議から最近までの十九世紀史を一般読者に紹介するために著述した『最近世史』を上梓するなどの動向が現れていたのであつた。

『明治以後に於ける歴史学の発達』（四海書房 昭和七年 以下同書をA書と略称する）の「西洋史学の発達」の「明治三十年以後の西洋史」（山中謙二）には、明治二十九年（一八九六）に刊行された坪井九馬三『最近世史』について次のように記している。

ナポレオン戦役後ウィーン会議以降は近世史の中でも殊に現代に関係の深いところで、我が国に於ては大なる興味が感ぜられ、又その研究は実益を与へることが多かつたので、最も重んぜられるところであつた。既に明治二十九年には坪井九馬三博士は「最近世史」を公にした。ウィーン会議に筆を起して最近にまで及び、十九世紀史を一般読者に紹介することを目的としたもので、よく事件の由来に遡つて懇切に述べ、系譜なども添へて頗る親切なものであつたが、専門家が学術的良心を以て筆を執つたといふ点から、其頃には我国の西洋史上に新紀元を画すべきものと推賞されたところであつた。

ついで

降つて大正十年には煙山専太郎氏の「西洋最近世史」が出た。

ウィーン会議から世界大戦終了迄に及ぶもので、諸国家の状勢、諸民族の盛衰、社会の変遷等を説き九百五十頁に上る大著で最近世史では最も詳細なものである。(ともに六六八頁)

と煙山専太郎『西洋最近世史』を紹介しているが、この煙山『西洋最近世史』については酒井三郎『日本西洋史学発達史』(吉川弘文館一九六九年 以下同書をB書と略称する)の「煙山専太郎の『西洋最近世史』」という見出しの項に

早稲田大学に講壇を持つ煙山専太郎は、一九〇八年すでに『日本最近世史』をあらわしていたが、いまや『西洋最近世史』を上梓した。ウィーン会議から第一次世界大戦の終末までが扱われているもので、いうまでもなく政治史的記述である。(九六頁)

とある。煙山の『西洋最近世史』の刊行は大正十一年(一九二二)であるが、西洋史研究者である煙山がそれより十四年前の明治四一年(一九〇八)に『日本最近世史』と題した著書を上梓していたということは、まことに興味深いことである(私は同書を見たことはないが、西洋史研究者による『日本最近世史』という書名の著書が明治四一年に出版されていたという事実だけで十分注目するに値するであろう)。

では何故に西洋史研究者の煙山が明治四一年というはやい時期に『日本最近世史』という書名の著書を上梓したのか、一見すると奇抜すぎることにようにみえようが、それにはたしか背景があったのである。

前記B書には「プロイセンⅡフランス戦争」という見出しの項があ

り、西洋が(日本から)「国家発展の過程においても近いものに考えられるようになったのは、とくにプロイセンⅡフランス戦争のころからであった」、「日本における西洋史学史上にも見逃すことのできないものである」(ともに六七頁)という記事がある。同戦争は一八七〇年(明治三)七月に起ったものであるが、はやくも明治六年には日本と同戦争の戦記類が出版されており、講話成立後も次々に同戦争の戦記類が日本で出版された書名が列記されている。

ここで坂井栄八郎「近代の官僚国家の成立—日本とドイツ—」(坂井『ドイツ近代史研究—啓蒙絶対主義から近代官僚国家へ—』山川出版社 一九九八年所収)に

プロイセン改革と明治維新はその間に半世紀の時間のズレがあるにしても、それぞれ緊急の必要に迫られ、だからこそ一層決然として、政治的・社会的に後進的な自国を先進的な外界—外国勢力は状況次第でプロイセンないし日本の国家的独立性を危うくする恐れもあったのだ—に適応させようとした。同じような試みなのである。

また

もちろん改革のテンポ、また変革の度合いは、異なる歴史的条件の下で、プロイセンよりも日本の場合の方がはるかに大きかった。明治維新とはどんなものか、その具体的なイメージを得たいと思うなら、ドイツで一八〇七年から一八七一年までかかり、多くの試行錯誤を重ねた上で実現されたものが、日本ではほぼ二〇年で完遂された、なおその際日本では「統一国家の建設」

(Reichgründung)が内政上の改革に先行したのだ、と考えればよいだろう。(三一頁)

と記されているのをあげておきたい。もちろん大正初年のころにこの坂井著書のような高度な理解があったはずはないが、しかしプロイセン改革と統一国家の建設が、明治維新の改革に似たものを当時の日本の知識層が感じ取っていたのであろう。

そして黒板は明治四一年（一九〇八）に二年間の欧米諸国出張に出发し、帰国の翌年に実地で見聞したことを『欧米文明記』として上梓した。そのころにはすでに煙山専太郎の『日本最近世史』も読んでいたはずなのである。黒板が『国史の研究』（大正二年版）を上梓した中で、日本の「最近世」史研究の必要を力説した気持は、「明治維新といふのが我が国史上重要な出来事で、大化改新以上の大なる史実なのである」こと、「明治時代は大正の今日からいへば之を最近世史として研究すべき十分なる理由を有して居る」として、普仏戦争後のドイツ帝国が統一された後の「最近世史」として研究されているのと全く同様に、と記した文のうちによくうかがうことができよう。

しかしながら明治維新以後の歴史を日本の「最近世」史として構築する仕事は容易にできることではなかった。ここで、前掲の藤井甚太郎「明治史研究の回顧」の冒頭部分を読みかえていただきたい。大学の講義題目に「維新史」がはじめて出たのが大正十年ごろ、ついで大正一四年度から京都帝大文学部で藤井が講義しはじめたという。明治維新すらこのような有様だから、明治史はなおさらだということである。それは史料が十分に出そろっていないかつたこと、関係者がまだ生きていないなどによるのであったらう、と藤井は記している。

このように、明治維新以後の研究の必要に迫られながらも、その学

問的研究を進める上での困難の大きさを痛感していた大正初期の黒板たちが、日本における「最近世」史研究の必要を説いたのは当然のことであつた。

そして、そのころには江戸時代の歴史学的研究も、文学や思想の面ではかなり進められていたけれども、歴史学上の構造研究に基づく総合研究が進められるのは戦後をまたなければならぬ状態であつた。

### 三、並列されていた「最近世」と「近世」

以上、黒板が大正二年に日本史「最近世」の研究の必要を説いたころからあと明治時代史の研究が進みはじめると、日本史概説では、江戸時代の別称の「近世」の次に接して「最近世」が置かれることになった。しかしこの「近世」はただの江戸時代の別称だったのであるから、西洋史での用語の和訳語「最近世」とは何のつながりもないまま両者は前後に相接したまま、大正を経て昭和に至つたのであつた。

だから黒板がやむを得ずに日本西洋史学界で使われていた和訳語を使って「最近世」と称した事情を知らない次の世代の人々は、「近世」（江戸時代）が基になって明治以後が「最近世」とよばれるようになったのかと思うようになって、仕方ないことだったであろう。今ふりかえてみると、このような異様な形で昭和も戦後二十年ほどまで使われ続けてきたことは不思議なことであつた。もちろん専門家の間ではこの「最近世」と「近世」とは全くの別物だということが分つていたのであろう。しかし、昭和に入ってくるころに日本史概説書が次々に出版されてくるようになると専門家の中にもなんとかしなければならぬと考える者が現れるようになった。今この問題に立入る余裕はないので一つ象徴的な事例をあげるにとどめるが、東京帝大国史学科

出身の有力メンバーの一人である大久保利謙が昭和一五年（一九四〇）に『日本近代史学史』を上梓している。その背景には、昭和一桁年代にはそれまで書名で明治・大正と表記されていたものが「近代」と記されるようになってきたことがある。<sup>8)</sup>

ここで本稿でさきに保留した大正年間の内田銀蔵の動きをとりあげよう。黒板と文科大同期の卒業生仲間であった内田銀蔵は、黒板が「最近世」史研究を提起してから五年後の大正七年（一九一八）に『近世の日本』を上梓した。内田がさきに『日本近世史』第一巻上冊を出版したまま、明治三九年に帰朝した後にも全く続稿出版に着手することなく、同書の中絶したことはすでに述べたとおりである。内田の『日本近世史』の構想が破綻したことは文科大の国史科の人々にもすぐ分っていたから、国史学界でも全く内田の同書中絶に言及することなくずっと過してきたのであろう。その中で大正二年（一九一三）に黒板がかの日本史「最近世」研究の必要を提起したのであった。そのことは、『日本近世史』構想の誤りの処置に苦慮していた内田にとって、最大の後押しと受けとめられていたと思われる（内田は前著『日本近世史』の中で西洋史から借りた「最近世」という用語で明治維新以後の時代を称していた）。内田が『近世の日本』を上梓して「近世」の定義を全面的に変えた背景には黒板の日本史「最近世」史研究必要の提言があったのではなからうか。

内田は『近世の日本』のはじめで、新たに「近世」を定義して「近世とは今と云ふ時を起点として、それに近い時代を指す訳である」とし「明治・大正の時代も近世に入れてみましても宜しい訳でござりませんが、明治以後は別に最近世と申す方が一層適当でござります」とした。「今と云う時を起点として」はまさに黒板の視角そのものであり、黒板の「最近世」が和訳語であることは承知の上でその基を「近世」

としたのである。そして同書はまさに江戸時代史として刊行されたのであった（前著『日本近世史』はモダンエイジに相当する時代を論証するためのものであった）。

しかしながらそのころの日本史学界は明治時代史はもちろん江戸時代史も本格的な総合史研究は全くなされていなかった（ともに本格的な研究がなされはじめたのは戦後からであった）。前代の残滓を除去して新しい史観を形成しようとする中で、はたして現在の起源を江戸時代にまで遡及させるといえることが、学界はもちろん人間界においても了承されることがあり得たであろうか。その後の日本史学界では『近世の日本』を江戸時代史としては評価したけれども、かの「近世」の定義は（内藤湖南を別として）同調した者が全く見られないまま過してきた。ようやく二十一世紀に入ろうとするころになって、明治時代の変化の淵源を江戸時代にまで遡及して考えようとする所論が現れはじめたが、それは明治時代と江戸時代との総合的体系的研究が進められたからであった。

ここで現在一般に江戸時代を英訳して *early modern Japan* と記されていることに一言しておきたい。このように英訳することがいつごろのような人たちによってはじめられたことなのか。私には分らない。三谷博は「一九六〇年代に『近代化論』を提唱したアメリカの日本史家たちの一部は、ジョン・ホールやマリウス・ジャンセンのように、そうして固定化された『近世』を *early modern* と翻訳するようになった。」とし、註でジョン・ホールたちが一九六八年に出版した英文の著書にそのように記されていることをあげている。しかしそのころ日本の学界で江戸時代を初期のモダンエイジと理解していたのだろうか。三谷も「当初、日本人の歴史家たちの多くはこれを退けようとした」と記しているように、そのころ日本の学界では明治のはじめごろ

から世間で江戸時代の別称として「近世」とよばれていたのを使っていただけだったのだから、江戸時代を初期のモダンエイジと想っていた者はいなかったと思われる。ではジョン・ホールたちは何故に江戸時代を *early modern* と英訳したのか。

それは日本で江戸時代を「近世」とよんでいるその意味を記したものはないか探して求めて内田銀蔵『近世の日本』に記された前記の定義をみつけたからであったと、私は考えている。ジョン・ホールたちがほかにどのような「近世」の定義をみつけたのか、日本近世史研究者の方から御教示いただければ有難い。内田の『近世の日本』の「近世」の定義であれば、それは同書が刊行された大正のはじめはもちろん戦後も二十一世紀近くになるまでそれを支持した意見はみられない定義であった。

江戸時代を、明治維新以後の「西洋化」された近代を合わせて広い意味での「近代」とみなすのが妥当であろうとした尾藤正英『江戸時代とはなにか―日本史上の近世と近代―』（岩波書店 一九九二年）の中で、

日本史上の「近世」は、英語ではしばしば *early modern age* と表記され、それは「近世」という文学から導かれた便宜的な翻訳にすぎないと、従来は考えられるのが普通であったが、実はそれが「近世」という時代の性格を、的確に表現した訳語なのである。（下略）（はじめに）

と記している。ここで従来は「便宜的な翻訳にすぎない」と普通に考えられていたと記したのは遠慮したい方で、実際は疑問視され無視されたといってもよいものであった。すぐれた江戸時代の研究者で

あり、人格的にも人々に敬愛されていた尾藤がこのように記したのだから、内田の『近世の日本』における「近世」の定義がずっと無視されてきていたことがわかるであろう。

#### 四、日本史時代区分用語としての「近世」と「近代」

右に引用した尾藤著書の副題は「日本史上の近世と近代」であり、同書の中では日本史における「近世」と「近代」との二用語についての記述が数箇所みられる。近世研究者の尾藤が平成四年（一九九二）に上梓したこの著書の中で記したのだから、日本史の「近世」と「近代」の理解として一般的なものといつてよいものであろう。

しかしながらこれら日本史上で普通に使われてきている「近世」と「近代」などの用語については、それらの用語がいつごろどのように使われてきて現今に至っているものかの検証がほとんどなされていなかったといつてよいのではなからうか。もとより私は、このような問題をとりあげるなど身の程知らずのことだということは十分自覚しているつもりである。だから今後、識者によって本格的にとりあげられることを期待しながら、あえて疑問を呈してとりあえずの私見を述べようというわけで本稿を記していることを了承していただきたい。

ここでとりあげようとする問題に言及している箇所は「序説 日本史の時代区分」に主としてみられるが、ほかにもあつて、それらの主要なものを以下いくつかとりあげてみよう。

a （個別の時代名称とは別に）今日の主題としての、全体の流れをどうとらえるかという立場から見た場合の時代区分があります。普通に使用されているのは、三分法と言いますか、三つに分ける



方式でありまして、古代・中世・近代と三つに分ける。表現の上から言いますと、古代と近代の間ですと中代と言わなければいけないわけで、ちよつと一貫性がないのですが、これは要するにヨーロッパ語の翻訳で、英語で言う「ancient age, medieval age, modern age」、ドイツ語だと「Altatum, Mittelalter, Neuzeit」ですね。それを翻訳として、明治以後に古代・中世・近代という言葉が当てられたのです。そういう時代区分の仕方は、西洋の歴史学が明治のころに入ってきて以来、学界ではかなり一般的に行われてきました。(三頁)

この英語・ドイツ語で記された西欧史三分法は、はたしてそのまま日本で受容されたであろうか。拙稿<sup>19)</sup>で述べたように、内田銀蔵がこの西欧史三分法を日本史に適用しようとしたことは内田が西欧留学中にその誤りに気付き、帰国後かの構想を立てた『日本近世史』を中絶したことにより、かの構想は一応全部否定された。しかし内田の渡欧中に中田薫が日欧封建制共通論にたつて日本の封建制研究を進める上で西欧史中世と合わせて日本史「中世」という時代区分を立てていた内田の構想の「中世」だけを受容し、内田が帰国した年に発表された論文にこの「中世」を使用しており、以後中田は次々とこの日本史「中世」を使った論文を発表していった。

中田はそこで「中世」の次の時代は「徳川時代」と記し、前の時代は「王朝時代」と記していた。それは、江戸時代の別称「近世」と記すと、ミドルエイジからモダンエイジへと誤解される危険性があるの、それを避けるための手段であった。ところが日本史「中世」をいはじめた人々は、次の時代を(「徳川時代」とはいわずに)江戸時代の別称「近世」とよんで、これが一般化したのであった。

これが基になって大正から昭和に入ったところから日本史学界で日本史「中世」という時代区分用語が定着していった。しかしながら西欧史モダンエイジはけつしてそのまま日本史時代区分として定着することにはなかった。このことは本稿で前述したとおりである。なお西欧史モダンエイジの和訳語は大正年間から「近代」に変えられたが、日本史で明治以後を「近代」とよぶようになったのは前述したように(西洋史での和訳語を借りていた)「最近世」を改める必要から「近代」と変えたり、またそれまで「明治・大正」と記してきたのがさらに「昭和」を加えると長い表記になってしまいうから「近代」とした、というようなことがあって、なにも西欧史モダンエイジに比定するためというわけではなかった。しかしその後日本史で明治以後を「近代」と記すことがどのように理解されたかは、あらためて検討すべき課題であるが。

**b** 近世というのが、なんとなく不安定なと言いますか、時代区分の上で落ち着かない状態におかれています。三分法から言いますと、はみ出していますし、近世という名称も仮に英語に直訳しますと、やはり *modern age* ということになってしまつて、近代と区別がつかみません。西洋史の研究者の中にも、近世という時代区分をお使いになる方がいるようですが、多分原語では近世と近代は区別できないのではないかと思います。要するに初期近代というような意味で近世の語を使っておられるのですが、きちんとした境目があるのかどうか、よくわかりません。(六頁)

ここで「近代という名称も仮に英語に直訳しますと、やはり *modern age* ということになってしまつて、近代と区別がつかみません」というの

は、実は西欧史時代区分の原語の明治時代の和訳語が行われていた時期のものと、西欧史時代区分のモダンエイジがあまりにも長くなりすぎて二分されてきたものを和訳した用語、とが混同されてしまったややこしい混乱の結果なのである。以下、順を追って説明していくことにしよう。

まず、昭和五七年（一九八二）に柳文章が上梓した『翻訳語成立事情』（岩波新書）に収められた「近代」（初出は一九八一年）で翻訳語の検討から導き出された一つの結論として、明治のはじめから西欧史 *modern age* という時代区分用語の正式な和訳語は「近世」であったが、それが大正以降に「近代」に変えられたということがある。実際に、戦後においても日本近代史学史関係の論文で西洋史モダンエイジの和訳語がかつては「近世」であったことをきちんとわきまえた記述をしているものがいくつかみられる。<sup>13)</sup>

ところがその正式な和訳語であった「近世」は、そのころ日本史で江戸時代の別称としての「近世」がさかんに使われるなど、同じ「近世」という用語がいろいろな用法で使われて読者が判別しにくいので問題になり、まず日本西洋史学界において西洋史モダンエイジの和訳語が「近代」に変えられた。ここでそれまで使われていた「近世」は捨てられることになった。

さてそのころやがて二十世紀を迎えようとしていた西欧の史学界では、十六世紀はじめから二十世紀まで四百年の間をモダンエイジとすることが問題となりはじめ、本稿で前述したようにモダンエイジの中でも殊に現代に関係が深い時期に大きな関心が寄せられるようになり、それが日本にも伝えられて「最近世」と和訳される時代の著書が刊行されるようになったわけである。このころにはまだ長いモダンエイジの中で現代に前接する部分を「最近世」とよぶ程度であったが<sup>14)</sup>、

やがて西欧の史学界では四百年にも及ぶモダンエイジを二分して、十九世紀以後の「近代」と、それ以前の三百年を異質な秩序と構造を持つ別の時代と、区分して考えるようになった。

『西洋中世史研究入門』（名古屋大学出版会 二〇〇〇年）に次のような記事がある。

中世に続くおよそ三〇〇年間のヨーロッパが、十九世紀の「近代」とは異質な秩序と構造をもつひとつの歴史的世界を構成していたと考えられるようになったことである。中世と近代のあいだに、長いもうひとつの「中間の時代」が発見されたともいえるように。英語で *early modern* と称される時代がそれであり、「初期近代」「前近代」等の訳語が充てられることもあるが、最近では「近世」という用語が定着しつつある。（二五九頁）

これは時代名称の和訳語をも記した有難い解説なので、ここに引用させていただいた次第である。これから分るように、前述したように日本西洋史学界で用済みになって捨てられていた「近世」という用語が、ここに新たに *early modern age* の和訳語として登場してきたのであった。以上みてきたように、西欧史モダンエイジの和訳語が、はじめは「近世」であったのが、大正以降に「近代」に変えられたのであるから「区別がつきません」というのは当たり前なのである。そして用済みで捨てられていた「近世」が、十九世紀以後の「近代」と区別されたそれ以前の時代名称アーリーモダンの和訳語として使われるようになったのだから、実は「きちんとした境目がある」のであった。

c 近世と近代。近世という時代名称が適当かどうか、これは江戸

時代から多分、近世という時代名称が使われていて、それが明治以後もそのまま使われたのだと思うのですが、要するに「近き世」です。近き世というのをそのまま漢語として読んだのですが、近代も訓で読めば近き代になりますから、同じ意味になるわけです。(十二頁)

江戸時代から近世という時代名称が使われていて明治以後もそのまま使われていたというのはそのとおりであって、明治のはじめから江戸時代の別称として「近世」が現今に至るまで使われてきている。しかしcの文ではその後の記事が問題なのであって、江戸時代の別称「近世」を「要するに「近き世」です」として、「近代」と同じ意味になるとしているが、これは明らかに誤りである。ここでいう「近世」は明治初期に作られた江戸時代の別称なのであって、それは江戸時代の人々が自分が生きている世を「近世」とよんだことに基づくのであり、「近き世」と解釈できるのは江戸時代においてだけいえることである。この江戸時代の別称「近世」は、要するに江戸時代と言い換えても差支えない文脈でだけ使用できるものである。まずこのことを確認しておかなくてはならない。

ところが、この江戸時代の別称が、bで述べた西洋史アーリーモダンの和訳語と同じであることから、同じ語でも両者全く別個の意味であるにもかかわらず、つい混同されてしまつて、江戸時代がアーリーモダンであるようなイメージが生じてしまったということもあつたのではなからうか。

もちろん日本に西洋文化が本格的に導入された明治時代に前接した江戸時代が、その西洋文化を受容して新体制を構築することができた素地を形成していたということから、明治を準備していた時代として

評価しようということは正当であつて、今後その研究が進められていくことであらう。

しかしそれを西欧史のモダンエイジとアーリーモダンにそのまま比定してよいかどうかは別問題であつて<sup>(1)</sup>、この西欧史の発展コースとどれだけ関係があるものかは今後の問題であらう。

このようなことが背景にあつて、ただの江戸時代別称の「近世」と、アーリーモダンの和訳語「近世」とが、同じものをいうイメージが生じてしまつていゝのではなからうか。

### おわりに

大正のはじめに黒板勝美が日本史で「最近世」史研究の必要を提起してからあと、戦後二十年ほどまで日本史時代区分で使われていた「最近世」については、いままで全く学界でとりあげられたこともなかったもので、私が気付いたことをいくつかとりあげてみた次第である。身の程知らずということは十分承知の上のことなので、関係分野（もちろん西洋史も）の方々からの御教示をお願いしたい。

### 註

- (1) 藤井甚太郎「先学者の学者に感謝する―明治史研究の回顧―」『明治文化史』概説 月報 洋々社 一九五五年。
- (2) 本文第二節で記すA書。
- (3) 岩波文庫『田沼時代』によつたので、現代かなづかいに改められている。
- (4) 内藤湖南が大正三年(一九一四)に発表した『支那論』(『内藤

湖南全集』第五卷 筑摩書房 一九七二年）は、内田『日本近世史』の「近世」概念に拠って中国史の近世を構想している。

(5) 拙稿「日本史「中世」の形成」（『史人』六号 二〇一五年）の巻末の補論「明治末・大正初年の「近世」の用語をめぐる」。なお同補論の「最近世」の記事における内田『近世の日本』に関する記事は、本稿によって訂正しなければならない。

(6) この明治四一年（一九〇八）は、黒板が『国史の研究』初版を出版した年なのであり、同年黒板は欧米諸国に向けて出発している。黒板がこの年に煙山『日本最近世史』を読んでいたかどうかは不明だが、黒板が帰朝した後に読んだのは確かであろう。

そのころ日本では歴史学専門家は五十年前までのことしかとりあげることができない「定め」だったのだから、日本で五十年前から以後現在までの期間をいう時期名称があるわけがなかった。だから西洋史の用語の和訳語「最近世」を使うしかなかったのであった。

(7) 『虚心文集』第七（吉川弘文館 一九四〇年）に収録されている。

(8) 註(5)拙稿の補論一〇頁上段の記事参照。なおA書所収「社会経済史」（土屋喬雄）に明治・大正・昭和に刊行された社会経済史関係の主要出版物を年代ごとに区切って列挙しているのをあわせて参照されたい。

(9) 三谷博『明治維新を考える』（岩波現代文庫 二〇一二年）二五三頁。

(10) 註(5)拙稿参照。

(11) 一例として岩井忠熊「日本近代史学の形成」（『岩波講座日本歴史』別巻一 一九六三年）九六頁。

(12) A書所収「明治三十年以後の西洋史」（山中謙二）に「近世史は

我国の西洋史界に於いては重んぜられるところである。（中略）併しそれも最近世やその他の特に興味を感じた時代に集中された傾はある。（六六六頁）、また「ナポレオン戦争後ウィーン会議以後は近世史の中でも殊に現代に関係の深いところで、（中略）既に明治二九年には坪井九馬三博士は「最近世史」を公にした。ウィーン会議に筆を起して最近にまで及び」（六六八頁）と記されているように、「近世史」の中における「最近世史」であったのである。

(13) このことは日本史学界の側からはやくに出されていたことであって、前述した内田『日本近世史』の構想が破綻し中絶したのを目前にした日本史学界では、西欧史三分法を公式的に受容するのではなく、日本史の立場から学んでいこうとする立場に変えていった。また日本の西洋史学界においても同様であって、さきごろ刊行された土肥恒之『西洋史学の先駆者たち』（中公叢書 二〇一二年）はよくこのことを記述している。

終わりに一言。江戸時代と明治時代との研究がそれぞれ総合的研究として進展したのは戦後のことであるが、その背景には時代の社会構造研究が飛躍的に進展したことがある。その契機としてマルキシズムの発展段階説がもてはやされたことがあったといえよう。マルキシズムの発展段階説は現在学界からほとんど姿を消しているが、日本史研究において社会構造研究を推進させたことは史学史に記しとどめられるべきことであろう。

### 【補論】江戸時代の別称「近世」について

江戸時代（厳密に言えば、戦国の世が終って天下統一の平和な世となつてからあと、徳川幕府が倒れて明治維新になるまで）を「近世」

とよぶようになったのは、明治初年のことであった。

まずはじめにこの「近世」という用語の由来をみておこう。「近世」という語は古くからだだ「今ごろの」というだけの意味で使われていたが、それが定まった上限をもって現在までをいう意味としてはじめて出現したのは戦国時代であった。藤原惺窩の『大学要略』に「上下トモニ利ニ溺レテ五倫悖乱シテ、近世ノ天下ノゴトクナランコトウタガヒナシ」とあり、本居宣長の『うひ山ふみ』に「近世三百年以来の人々の説は」とあるが、『うひ山ふみ』が刊行された一七九九年から三百年前はちょうど戦国時代の初期である。だから戦国の世が終って天下統一の世となると、当然ながら人々は世が変わったことを意識した。『御伽草子』の「猫のさうし」に「天下太平国土安穩、かかるめでたき御代にあふこと、人間は申に及ばず、鳥類畜類に至るまで、有りがたき御政道なり、まことに堯舜の御代にもすぐれたることなり」とあることはそのことをよく示している。だから世の人々はこの「天下太平国土安穩」の世を新たに「近世」とよびはじめたのであった。江戸時代の人々が自分の暮らしている世を「近世」とよんだのは、戦国時代の人々が使い始めていた「近世」という用語を受け継いだものであって、けっして「近世」という用語が江戸時代の専有物ではなかったことをまず確認しておこう。

だから当然のことながら、徳川幕府が倒れて明治新政府の世に変わると、人々はその変わった世を「近世」とよびはじめようとしていたのであった。『明六雑誌』に収録されている阪谷素「天降説」（明治八年四月一日演説）には「わが国古より自主自由に偏して外国交際の道を舍く、近世ようやく開け交際の道重きを知る」とあり、この「天降説」の論旨からしても明治の新時代を迎えようとしていることから新たな「近世」のはじまりと意識されていたことがわかる。では何故に、

その後この明治の新時代を「近世」とよぶ慣習ができなかったのだろうか。

徳川幕府が倒れて明治新政府の世となると、世間の人々の間で過ぎ去った江戸時代のことを何とよぶかが問題となった。そしてそれは、それまで人々がずっとよびならわしていたとおり「近世」とよぶことにされた。

黒板勝美の『国史の研究』（大正二年版）と『更訂国史の研究』との総説に掲載されている国史関係主要出版物年表は、明治元年から後の国史関係主要出版物を一年毎に列挙したものが、それによると明治六年度から「近世事情」「近世太平記」「近世野史（元治―慶応）」と「近世」を冠した書名が現われはじめ、以後毎年のように「近世」を冠した書名が掲載されていく。

なお明治四年の頃に「慶弘紀聞 安田照次撰（後水尾天皇慶長五年ヨリ孝明天皇ノ弘化三年ニ至ル十三朝ノ記事故ニ一名十三朝紀聞トイフ、附録ニ今日抄アリ）」（大正二年版）とあり、『更訂国史の研究』のものではこれが「慶弘紀聞 一名十三朝紀聞（慶長五―弘化三） 安田照次撰」と簡略化されている。このように「十三朝紀聞」とも称されたというのは、明治四年前にはまだ「近世」が一般化するに至っていないことを示すとみてよいのであろうと思われる。

右の国史関係出版物年表にみられるように、明治六年（一八七三）には（江戸時代の別称）「近世」を冠する書名が現われはじめて、これが現在に至っているのであった。

このようにすでに明治のはじめに世間の人々が「近世」を過ぎ去ったばかりの江戸時代の別称として使いはじめ直ちに一般化したのだから、もはや定まった上限をもって現在までをいう「近世」の用法を、明治の世に適用することができなくなってしまうのである。かくて

「近世」という用語は江戸時代の別称として固定したまま現今に至っているわけである。

だから現在私達が普通に使っている江戸時代の別称「近世」は、江戸時代の人々が自分たちが暮らしている世をさして称した用語のまま、それが現今に至っているのだということを忘れてはならない。日本の西洋史学界で、early modern の和訳語として「近世」が定着しつつあるというのも、江戸時代の別称「近世」とは関係がない同称異物なのである。

補論註

(1) 『日本思想体系 藤原惺窩 林羅山』（岩波書店 一九七五年）。

大学院演習『小右記』講読担当者一覧①

二〇一四年～二〇一七年

演習日	担当条	担当者
二〇一四年		
四月一日	寛弘八年二月一九日～二二日条	弘胤 佑
四月二五日	寛弘八年二月二七日条	孟 瑜
五月 二日	寛弘八年二月二七日条	後藤雄大・都築宏幸
五月 九日	寛弘八年二月二七日条	古本理恵・金平桃子・菅近晋平
五月二六日	修士論文予備発表	弘胤 佑
五月二三日	寛仁二年一〇月一日～四日条	孟 瑜
五月三〇日	寛仁二年一〇月五日～六日条	後藤雄大・都築宏幸
六月 六日	寛仁二年一〇月七日条	古本理恵・金平桃子・菅近晋平
六月二三日	修士論文予備発表	弘胤 佑
六月二〇日	寛仁二年一〇月八日～一一日条	孟 瑜
六月二七日	寛仁二年一〇月一四日～一六日条	後藤雄大・都築宏幸
七月 四日	寛仁二年一〇月一六日条	古本理恵・金平桃子・菅近晋平